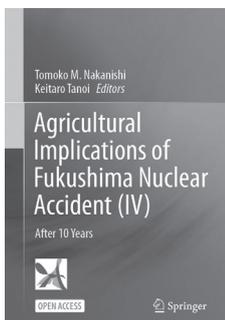


Agricultural Implications of Fukushima Nuclear Accident (IV) After 10 Years

Tomoko M. Nakanishi, Keitaro Tanoi (編者)



研究によって得られたデータを主要なコンテンツとする書籍を出版することにどのような意義があるのだろう、と考えたことがある。教科書でも学術論文でもない、書籍、しかも Open Access である。

本書の編者の1人は中西友子先生で、私の恩師である。

もう20年以上も前になるが、半減期2分の放射性酸素¹⁵Oを使って植物体内の水の動きを定量解析するという先生の実験のお手伝いをしたことがある。高線量の¹⁵Oを、取出口から廊下を通過して植物実験室まで運ぶとなると、どんなに急いでも一定の被ばくは避けられないというのが難点であった。そこで、リレー方式で¹⁵Oを運ぶことにしたのだが、先生は最も被ばく量が多いパートを率先して担っていた。「放射線は危ない」、「この程度は大丈夫」等の言葉では説明しきれない、放射線との付き合い方、心構えのようなものを、この時の先生の行動が語っていたように思う。

さて冒頭の疑問について。データ、それも生データを中心にした内容の書籍という点、その研究者のライフワークが総括された、自伝的な意味合いを持った書籍を思い浮かべる。例えば中西先生も、放射線を使った植物研究をまとめた本を書かれている。あるいは、共通のテーマのもとに行われた多様な研究の集合。学術論文では総説というカテゴリーがあるが、それでは納まりきれない場合に書籍での出版は有効かもしれない。そして一見、本書はこのケースに当てはまる。しかし実際に読んでみると、書籍での出版が持つ新たな意義にも気付かされた。それは、まさに本書の副題である「After 10 Years」に表れている。

福島第一原子力発電所の事故の後、事故に関連した研究の成果を発表し合うセッションが多くの学会で設けられた。しかし、そのようなある種の分野横断的なセッションは10年を経過するとほとんどが解消され、

事故に関連した研究は、それぞれの“本来の”専門分野へと離散していった。もちろん、事故後数年の間に一定の結論を得て終了した研究課題も多い。しかし一方で、初期の短期間の調査では結論が得られない、と判断され、地道な研究活動が継続されている課題もある。そのような研究活動によって得られたデータが一堂に会したのが本書であり、多方面で蓄積した成果や課題を俯瞰し、改めて総合的に考察するという意義があると感じたのである。

本書を象徴するのが、時間(年)を横軸にしたグラフであろう。第2章では、2011~2021年までにモニタリング調査が行われた農作物の放射性セシウム含量の推移が紹介されると共に、福島県の農業の現在地が説明される。第3章では飯館村の1か所の水田で2015~2021年までに収穫されたコメの放射性セシウム測定結果が示され、玄米への放射性セシウム移行係数が2019年以降は下げ止まったという現象が紹介されている。放射性セシウム濃度が高まりやすいことが知られているキノコについても、演習林内の特定の位置で10年間採取し続けた結果が第16章で登場する。

また、森林樹木を扱った章が比較的多いという点も、本書の特徴と思われる。森林や樹木を汚染した放射性セシウムがどう動いていくか、という問題は事故直後から提起され、事故後数年間での調査結果や、それに基づいたシミュレーション結果が発表されてきたわけであるが、事故から10年が経過し、いよいよ実態が見えてきたと感じる。森林や果樹園での調査研究や木を材料とした実験の結果が豊富に掲載されており、データそのものは勿論のこと、研究者が何を背景に何を考え何を知らうとしたのかが各章で少しずつ異なる、その多様さも本書の面白さかもしれない。この点において、本書は分野横断の書面セッションとも言えそう。

原発事故の後には放射性セシウムに関する情報を集めていたけれど、いつの間にか止めてしまった人は多いだろう。エビデンスが大事と分かっている、他分野にわたって学術専門誌をフォローすることも至難の業である。そういえば当時気になっていたあの問題、結局のところどうなったの? そんな問いへの答えが、この本を読むと見つかるかもしれない。

(小林 奈通子 東京大学大学院農学生命科学研究科)

 (ISBN978-981-19-9363-3, 276 頁, 定価 ソフトカバー版 5,719 円 (税込), ハードカバー版 7,149 円 (税込), オープンアクセス PDF ダウンロードはこちら ⇒ Springer Singapore, <https://link.springer.com/book/10.1007/978-981-19-9361-9>, 2023 年)